

創業江戸後期 伝統工芸「京和傘」

固日吉屋





日吉屋について

日吉屋の創業は江戸時代後期、初代当主墨蔵が京都・五条本覚寺周辺に和傘工房を構えたことに始まります。その後上京区東西町に移転した後、二代目与三郎の代に、皇女ゆかりの尼寺である百々御所(宝鏡寺)の門前に店舗を構え、以来百数十年にわたり、京和傘を作り続けてきました。

時代の変遷の中で、京都に残る唯一の京和傘制作工房になってしまった現在も、各地に伝わる伝統行事や祭礼に使われる和傘の制作・修復、各種伝統芸能の小道具制作、修理などを行っています。培われてきた独自の技術を活かし、日本文化の継承に努めると共に、「伝統は革新の連続」という信念のもと、千年の歴史を誇る和傘が持つ優れた構造や伝統美を活かし、現代の生活の中で使うことのできるデザイン・インテリア商品の提案にも取り組んでおります。

目次

京和傘について

和傘の歴史と「京和傘」	02
京和傘の制作工程	03

日吉屋の定番商品

本式野点傘	04
妻折野点傘	08
差し掛け傘 / 祭典傘	12
特選番傘	16
蛇の目傘	20
蛇の目傘 / 羽二重	24
ryoten	28
ばらそる(和風洋傘)	32

特注和傘

名入れ / 絵付 / デジタル印刷	33
-------------------	----

関連商品・特注商品

傘立台 / 床机 / 毛氈	34
---------------	----

修理・修復傘

修理 / 修復事例	37
-----------	----



京和傘について

和傘の歴史と「京和傘」

和傘は奈良時代前後に仏教やお茶、漢字などと同じく中国より伝来したと言われています。平安時代の絵巻物に登場する和傘は、現在のような形ではなく、かさ(蓋・笠)であり、天蓋や覆い状のようなもので、貴人に差しかけて日除けや魔除け、権威の象徴として使用されていました。この時代、傘は開いたままで閉じることができなかったようです。

和傘を閉じたり開いたりできるようになったのは安土桃山時代と言われています。今では当たり前になった傘の開閉機構は、実は非常に繊細な技術で作られており、数ある工芸品の中でも和傘ほど複雑に変化する構造を持つ工芸品は多くはありません。広く一般に使われ始めたのは分業制の発達した江戸時代中期以降のことで、江戸期の浮世絵にも和傘をさしている町人の姿が多く見られ、生活必需品として広く普及していたことがうかがえます。

京都は都として古くから栄えて来た土地柄、最も早くから和傘が使われてきました。都ならではの審美眼の厳しい人々に使われる中で、華やかな装飾を廃したシンプルさと最高級の素材と技術で仕上げられた、京都独自の上品さを持つ和傘が「京和傘」として発展してきました。

最盛期には日本全国で年間1700万本以上生産されていた和傘ですが、その後、明治時代に洋傘が輸入され、西洋化が進んで普及すると急速に衰退、全国的にも和傘の工房は現在十数軒を残すのみとなりました。京都独自の技法を用いた伝統的な「京和傘」制作を行う工房も弊社ただ1軒を残すのみとなり、昔のように生活必需品として使われることは少なくなりましたが、現在でも神社仏閣等の伝統行事や、祇園祭・葵祭などの祭り、歌舞伎や日本舞踊、茶道等で使われる伝統工芸品として日本文化の中で愛され続けています。

京和傘の制作工程

厳選された自然素材の特性を活かしながら作られた京和傘には、伝統に裏打ちされた雅やかさと優美さがあります。

是非一度手に取ってご覧いただき、本物の京和傘の魅力と、背景にある日本のものづくりの歴史を感じていただければ幸いです。



3 軒紙張り

傘の外周に「軒紙(のきがみ)」を張ります。骨の間隔の固定、胴張り作業の糊しろ、補強のために行います。使用する糊も全て自家製です。



7 手元

傘の内側の下ロク口(傘下部のロク口)側に和紙を張ります。ロク口と小骨の可動による破損の防止と、装飾を兼ねています。



11 油引き

和傘に防水効果を持たせるため、植物性油(京和傘では亜麻仁油)を塗布します。



4 中置き張り

竹骨が合わさる「中節(なかぶし)」部分に、带状に和紙を張ります。特徴的な装飾と摩擦による胴紙への負担を軽減する役割があります。



8 姿付け

和紙に正しいたみ癖が付くように、少しずつすぼめながら親骨に沿って渦巻き状に折り目を付け、たたんでいきます。



12 天日干し

雨をはじくよう、天日で干して油を乾燥、硬化させ撥水・防水効果を持たせます。夏は2週間、冬や梅雨時期はさらに時間をかけ、天日干しを行います。



1 下事

傘を開閉するのに重要な部品である上下一対の「ロク口」と呼ぶ木製部品と、竹骨を一本ずつ繋ぎ合わせて傘の骨組みを作ります。



5 胴張り

胴紙と呼ぶ、裁断した和紙を骨組みに張る作業です。和紙と和紙の継ぎ目が分からないように張り合わせる熟練の技が必要です。



9 頭包み

天ロク口を包んでいくように和紙を張り、傘の頭の部分を立体的に成形します。



13 糸飾り

傘の内側を色とりどりの糸で装飾します。(糸飾りをしないデザインの和傘もあります。)



2 まくわり

竹素材の癖を読み、熟練の技で竹骨の間隔を均等に調整します。傘の仕上がりを大きく左右する重要な作業です。



6 みの

天ロク口(傘上部のロク口)と胴張りの間に和紙を落とし込み、水を使いひだを作るように張っていきます。



10 骨上塗り

骨の上に、カシュー(または漆)を塗る作業です。胴紙とのコントラストによる美しい見た目と、骨上の部分を保護する役目があります。



14 カッパ付け

傘の頭の部分を覆うように「カッパ(防水生地)」を取り付けます。吊り下げられるよう真田紐を綿糸で固定し完成です。



本式野点傘
Honshiki-Nodate-Gasa

茶道家元御用達の本式野点傘は、日吉屋が誇る「京和傘」を代表する伝統の逸品です。「直の端(ちよくのはし)」と呼ばれる美しいシルエットが特徴で、無地のほか、「段張り(だんぱり)」と呼ばれる高度な技法を用いて赤白・緑白の二色張りの制作も行っています。

厳選された素材を活かした、格式高い場面に相応しい「京和傘」の最高級品です。

※野点(のだて)：屋外で催される茶会のこと。野点傘は茶室の役割を果たすとも言われます。

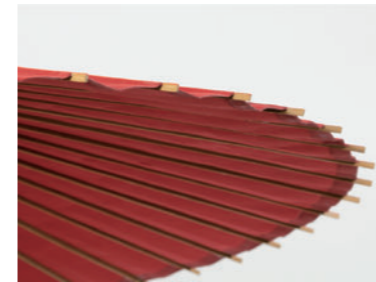


お茶席を演出する「侘茶」の大傘

本式野点傘は、三代目伊三郎の代に、裏千家家元十四代 淡々斎宗匠から、今上上皇の立太子礼(りつたいしらい)を寿ぎ、1952年(昭和27年)京都で催された祝賀茶会用の特注品としてご用意いただいた事をきっかけに生まれました。

「侘茶(わびちゃ)にふさわしい野点傘を創りたい。」との思いを受け、宗匠の求める「わび・さび」の世界感に相応しい野点傘を生み出すため、長く試行錯誤を繰り返した逸話が残ります。和紙を何度となく染め直し、宗匠の求める色を追い求めた結果、日吉屋独自の趣ある色合いが生まれたほか、軒部分は「直の端(ちよくのは)」と呼ばれるまっすぐな形状、内側はシンプルな和紙飾りを採用し、華やかな装飾を極力排した普遍的なデザインとなりました。

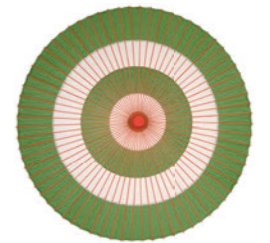
厳選された最高級の手漉き和紙と竹を用いて、熟練の職人が精魂込めて作り上げたその姿には、優雅さと凛とした気品が漂います。



無地(赤)



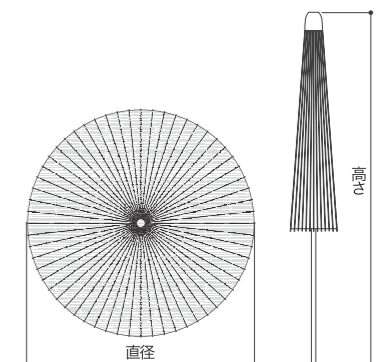
段張(赤白)



段張(緑白)

商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
25尺	φ1,600	H2,150	50目	無地(赤)
3尺	φ1,780	H2,150	60目	無地(赤)
3.5尺	φ2,180	H2,500	70目	無地(赤)
3.5尺/段張	φ2,180	H2,500	70目	赤白/緑白
5尺	φ2,750	H2,660	50目	無地(赤)
5尺/段張	φ2,750	H2,660	50目	赤白/緑白





妻折野点傘

Tsumaore-Nodate-Gasa

妻折野点傘(つまおれのだてがさ)は傘の端の部分が湾曲したデザインになっており、内側の小骨に綺麗な飾り糸を多用しているのが特徴です。現在最も普及している野点傘で、神社仏閣や各地の祭礼、伝統行事のみならず、店舗の内装など、幅広く使用されています。



雅やかな、朱の大傘

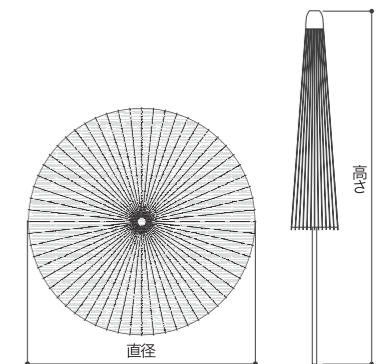
妻折野点傘(つまおれのだてがさ)は古代中国より仏教と共に伝来したと言われている、和傘のルーツともいえる大傘です。傘の親骨の先端部分が湾曲している雅やかなシルエットと、内側に施された多色の糸飾りが特徴です。黒染めした竹骨と赤い和紙のコントラストが美しく、太陽の下で広げた時にもひととき華やかな印象があります。屋外で催される茶会や神社仏閣での伝統行事、婚礼などに幅広く使われます。

また旅館や和食店、旅先の休憩所などにも、風情のある和風インテリア空間を演出します。



商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
25 尺	φ1,400	H1,950	50 目	無地(赤)
3 尺	φ1,690	H2,300	60 目	無地(赤)
3.5 尺	φ2,000	H2,500	70 目	無地(赤)





差し掛け傘 / 祭典傘

Sashikake-Gasa / Saiten-Gasa

名前の通り貴族や僧侶、神官等の高貴な方に対して、お供の者が差し掛けるために考案された和傘ですが、近年では婚礼の際に新婦に差し掛けるなど、一般に広くお使いいただいております。

野点傘よりも小さく軽く作られておりますのでお取り扱いが簡単です。デザインも飾り糸などの装飾がなく傘の端もまっすぐで本式傘に近いシンプルで上品な和傘となっております。



格式ある祭礼を彩る伝統の美

差し掛け傘は、番傘をひと回り大きくした和傘です。素の竹を割ったやや厚めの骨50本と長い持ち手の中棒を用いて、基本は自分で持つのではなく、誰かに差し掛ける目的で作られています。竹骨の上には国産の手漉き和紙を張り、天然の亜麻仁油を引いて天日干しで乾燥させることで防水しており、日除けとしてだけでなく、雨の日も安心してお使いいただけます。大陸から日本に傘が伝来したのは奈良時代のこと。当時の傘は魔除けや宗教行事に使われる神聖なものであり、従者が高貴な人に差し掛けていた様子が古い絵画などに残っています。そんな歴史を受け継ぐ差し掛け傘は、今でも神社仏閣の行事を司る神官や僧侶、あるいは和装に身を包んだ花嫁のために差し掛けて使われています。



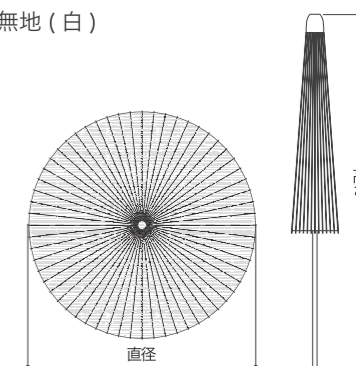
無地(赤)



無地(白)

商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
23尺	φ1,360	H1,240	50目	無地(赤)/無地(白)





特選番傘

Tokusen Ban-Gasa

特選番傘は厳選された竹骨と最高級の手漉き和紙のコントラストが美しい雨傘です。素の竹を割ったやや厚めの48本の竹骨と太い竹の柄を用いた、頑丈な作りが魅力です。

竹骨の上に熟練の技で手漉き和紙を張り、天然の亜麻仁油を引いて、天日干しで乾燥させることで防水しており、雨の日も安心してお使いいただけます。

ほのかな亜麻仁油の香りや、頭上でパラパラと鳴る雨音など、五感で雨の日をお楽しみください。



「番」の名のとおり、普段づかいに

番傘の「番」には諸説ありますが、「いつもの・普段使いの」を意味すると言われています。「番茶」や、京都の家庭料理「おばんざい(お番菜)」と同様、気取らず使える存在であり、昔は番傘といえば、様々な屋号や家紋、文字を入れて、職場や学校、旅館などの置き傘としても広く使われていました。

番傘の中でもっともポピュラーなのは白ですが、日吉屋の特選番傘(白)は、骨上に茶色と黒の塗り分けを施した伝承のデザインが特徴です。上品な黒や、華やかな赤も人気です。



無地(赤)



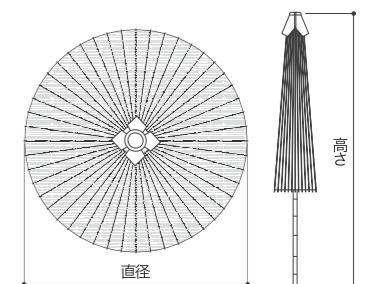
無地(黒)



無地(白)

商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
1.9尺	φ1,060	H750	48目	無地(赤)/無地(黒)/無地(白)





蛇の目傘

Janome-Gasa

蛇の目傘(じゃのめがさ)は、番傘に比べて細身で繊細な雨傘です。44本の竹骨が作り出す軽やかなシルエットは、男女問わずお使いいただけます。黒塗りを施した細身の木柄には、持ち手部分に藤を巻き、金属製の石突を付けました。さらに傘の内部にも絹糸で美しい糸飾りを施しており、意匠性を高めています。

竹骨の上には色鮮やかな国産の手漉き和紙を張り、天然の亜麻仁油を引いて、天日干しで乾燥させることで防水しており、雨の日も華やかな気分で安心してお使いいただけます。ほのかな亜麻仁油の香りや、頭上でパラパラと鳴る雨音など、五感で雨の日をお楽しみください。



白い輪が印象的な「中入り」で華やかに

大正時代に北原白秋が作詞した童謡「あめふり」に「あめあめ ふれふれ かあさんが じゃのめ で おむかえ うれしいな」と歌われているように、蛇の目傘はかつてはどの家庭でも普段の生活の中で使われていた雨傘でした。

「蛇の目(じゃのめ)」とは、文字通り蛇(へび)の目のような丸い輪のモチーフのこと。古来より神の使者として、魔除けの力を持つと信じられてきた古事にあやかったデザインです。

現在では模様のない無地の傘も「蛇の目傘」と呼ぶようになってきているため、無地と区別するために色和紙と白和紙で丸い模様を張り分けた傘を、中入(なかいり)と呼んでいます。



無地(赤)

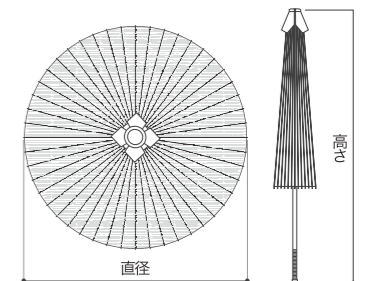
無地(紫)

中入(赤白)

中入(紫白)

商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
1.9尺	φ1,130	H740	44目	無地(赤)/無地(紫)
中入 1.9尺	φ1,130	H740	44目	中入(赤白)/中入(紫白)





蛇の目傘 / 羽二重

Janome-Gasa / Habutae

羽二重(はふたえ)は「蛇の目傘」の最高級品です。

44本の軽やかな竹骨の上に、薄く漉いた手漉き和紙と薄い正絹生地を重ねた、色鮮やかな「羽二重」という耐久性の高い張地を用いています。黒塗りを施した細身の木柄には持ち手部分に籐を巻き、金属製の石突を付けました。さらに傘の内部にも絹糸で美しい糸飾りを施しており、意匠性を高めています。

天然の亜麻仁油を引いて、天日干しで乾燥させることで防水しており、雨の日も安心してお使いいただけます。また、羽二重は雨に濡れると絹の光沢が一層鮮やかになります。ほのかかな亜麻仁油の香りや、頭上でパラパラと鳴る雨音など、五感で雨の日をお楽しみください。



濡れるほどに際立つ、絹の艶を無地で楽しむ

大正時代に北原白秋が作詞した童謡「あめふり」に「あめあめ ふれふれ かあさんが じゃのめで おむかえ うれしいな」と歌われているように、蛇の目傘はかつてはどの家庭にもあった普段使いの和傘でした。羽二重は、雨に塗れると絹の光沢が一層鮮やかに。和装によく映える赤や紫の羽二重生地と竹骨のコントラストをお楽しみください。



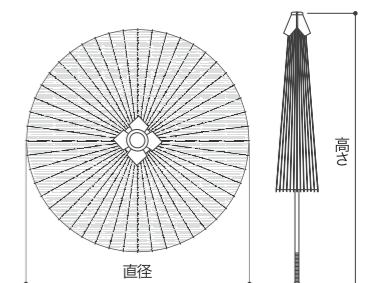
無地(赤)



無地(紫)

商品詳細

仕様	直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
1.9尺	φ1,130	H740	44目	無地(赤) / 無地(紫)





ryoten

雨天でも晴天でも使えて、和傘よりはるかに軽く、洋傘より環境負荷を軽減。かつて江戸時代に実際に使われていた晴雨兼用傘「両天傘(りょうてんがさ)」のDNAを受け継ぎつつ、現代の暮らしにふさわしい、実用性を兼ね備えたデザイン和傘が「ryoten」です。

洋傘の骨が通常8-16本なのに対し、ryoten はその4倍の36本の竹骨を繊細に組み上げながらも、一般的な和傘と比べて約半分の軽さ(約250g)を実現しました。傘骨やロクロ部分には和傘と同じ自然素材である竹と木を使っており、伸縮できるスライドシャフトの柄はアルミ製でリサイクル可能。

傘生地には耐久性が高く、幅広いデザイン表現が可能な防水ポリエステル不織布を採用。廃棄する際には、素材ごとにバラバラに分解できます。

和傘の美しさと洋傘の利便性を両立させ、和傘でもなく、洋傘でも無い、環境に配慮した「第三の傘」として生まれ変わりました。



和傘のエコを継承した、驚くほど軽い晴雨兼用傘

和傘の構造をもつryotenは傘骨やロクロ口部分には自然素材である竹と木、柄はリサイクルが可能なアルミ製スライドシャフトを採用しており、環境負荷にも配慮した新たなデザイン傘です。

洋傘の場合、閉じると生地が骨の外側に張り出し、それを巻きつけて収納するようになっていますが、ryotenは和傘と同じく、生地が内側に収納されるため、水滴が洋服に触れにくく雨の日でも快適です。

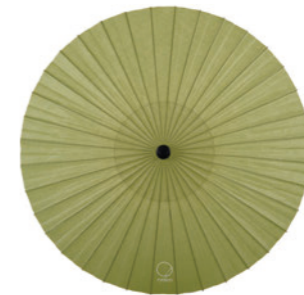
柄をスライドさせると約54cmとコンパクトに収納することができ、手提げタイプ、ショルダー紐タイプの2WAYに切り替えられる専用傘袋に収納して手軽に持ち運びいただけます。



真紅



墨



若草



空

商品詳細

直径(mm)	高さ(mm)	骨目	色
φ860	H690(収納時:H545)	36目	真紅/墨/若草/空



ぱらそる (和風洋傘)

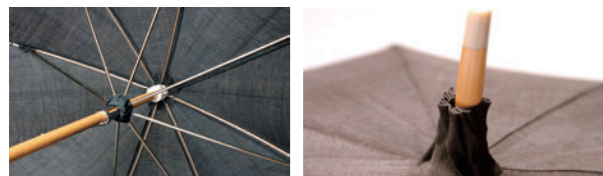
Parasol

和装にも洋装にも合う「和風の洋日傘」を差したいという、お客様からのご要望をもとに企画・デザインした日吉屋オリジナルの和風洋傘(日傘)「ぱらそる」です。涼しげな麻の生地を天然の柿渋(かきしぶ)で染め上げた日傘は、柿渋の特性として日光に当たる程に色が濃くなっていきます。手作りの味わいが感じられる和風洋傘は、着物と合わせても、また普段着の洋服と合わせても夏のお出かけを涼しげに演出します。



輪とんぼ(グレー) 輪とんぼ(ベージュ) とんぼ渦(グレー) とんぼ渦(ベージュ) 無地(黒) 無地(グレー)

【追加でUVカット加工も可能です。】



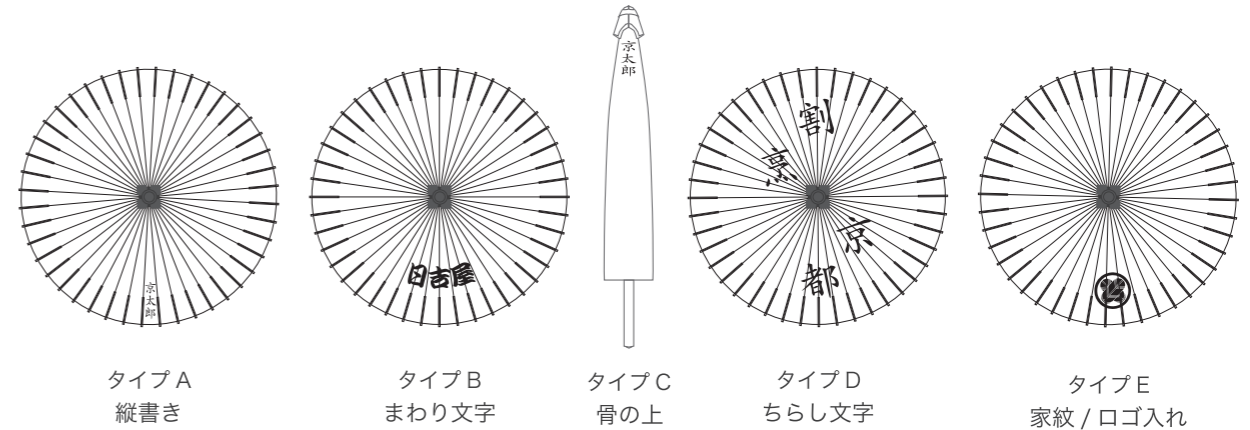
商品詳細

直径(mm)	高さ(mm)	骨目
φ840	H770	8目

特注和傘(名入れ/絵付/デジタル印刷)

Taylor-made WAGASA

※名入れ加工のみでのご注文はできません。和傘のご注文に追加してください。



- ・各種和傘(野点傘、差し掛け傘、特選番傘、蛇の目傘)に、ご希望の名前や文字等をお入れします。
- ※ご希望の文字やロゴ、家紋をお伺いした後、「文字・家紋・ロゴ入れイメージ」をご確認いただき、制作いたします。
- ※「タイプE 家紋・ロゴ」については、複雑なロゴは手書きではお入れできない場合があります。
- ・和紙調ポリエステル不織布張りの特注和傘には繊細なデジタル印刷も可能ですので、お問い合わせください。
- ・文字書体：楷書、行書、勘亭流、一般的な書体、指定書体。(指定書体の場合は見本をご用意ください。)

楷書：日吉屋 行書：日吉屋 勘亭流：日吉屋

- ・家紋：家紋帳記載の一般的な家紋、指定家紋。(見本をご用意ください。)
- ・文字色：黒、赤、金、銀等一般的な色。
- ・日吉屋オリジナル開発の和傘用「和紙調ポリエステル不織布」によるデジタル印刷で多様なデザイン表現が出来る各種特注和傘の制作も承っております。詳しくはお問い合わせください。

家紋入れ加工



和紙調ポリエステル不織布デジタル印刷和傘





本式木製傘立台



鉄製傘立台



本式木製傘立台 (左)

Honshiki wooden stand for Nodate-Gasa

本式木製傘立台は、本式野点傘に馴染むよう専用に設計された日吉屋オリジナルデザインの高級傘立台です。本式野点傘の美しさをより一層引き立てるためにデザインされており、4本の脚は緩やかな曲線を描き、傘本体と一体感のあるシルエットを形作り安定感をもたらすと共に、その重量を受け止め転倒しないよう支える重要な道具です。本式野点傘だけでなく全ての種類の野点傘に使うことができます。

※強風下でのご使用は転倒の危険性がありますのでお控えください。※組み立て式ですので、コンパクトにたたんで収納いただけます。

鉄製傘立台 (右)

Metal stand for Nodate-Gasa

本式から妻折まで幅広い野点傘が使用できる汎用の鉄製傘立台です。黒塗りの鉄製で高級感があり、お茶席はもちろん、イベント等、様々なシーンでご使用いただくことができます。土台と軸の取り外しができ、分解収納が可能ですので保管の際に場所を取りません。重量があり、様々なサイズの野点傘を安定して立てることができる傘立台です。

※屋外で使用する場合や大型の野点傘で使用する場合はベース板の穴に杭を打つか、ブロックなどで補強し、倒れないように工夫してください。



商品詳細

仕様	最大幅 (mm)	高さ (mm)
本式木製傘立台	650	H800
鉄製傘立台	490	H350



3人掛け



2人掛け



2人掛け



床机

Shoji

主に野点 (のだて：屋外で催されるお茶席) の席で使用される竹製の腰掛です。野点傘や毛氈 (もうせん) と合わせてご使用いただくと、雅やかに野点の場を演出することができます。

自然観あふれる京銘竹の美しい色合いと質感は野点の席に最適で、優雅な空間を演出します。お茶席に限らず屋内外のインテリアとして、あらゆる場所でお使いいただけます。

商品詳細

仕様	縦 (mm)	横 (mm)	高さ (mm)	素材
2人掛け (折り畳み式)	360	1,000	400	竹
3人掛け	370	1,370	450	竹



毛氈(もうせん)

Mosen

主に野点(のだて:屋外で催されるお茶席)の席で使用される、床机等にかけて使う毛織物の敷物です。野点傘や床机と合わせてご使用いただくと、雅やかに野点の場を演出することができます。

毛100%で防虫加工が施され、安心してお使いいただけます。サイズは厚さと大きさを各種取り揃えております。お茶席以外にも、旅館やホテル、料亭、飲食店、寺社神社仏閣等のあらゆる和風な場所でご使用いただけます。もちろんご家庭でご使用いただいてもスペースを雅やかに演出できます。

商品詳細

仕様	縦(mm)	横(mm)	厚み(mm)
寿老	910	1,820	2
天壇	950	1,900	3

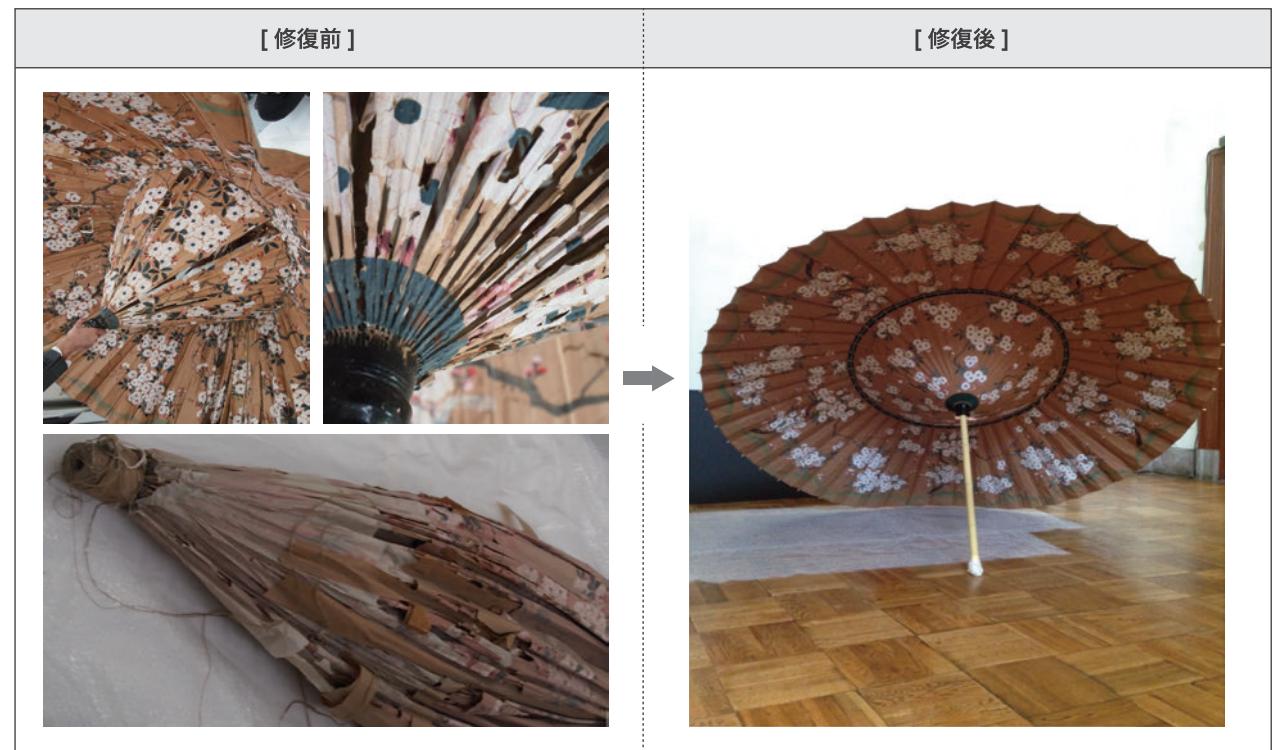
修理・修復

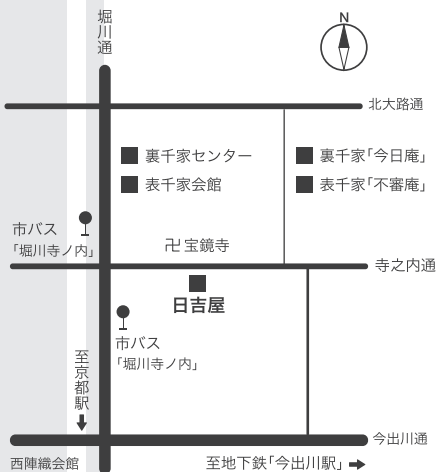
傘の修理・新調を承っております。詳しくはお問い合わせください。

・修理 / 修復事例 1



・修理 / 修復事例 2





株式会社 日吉屋
〒602-0072 京都市上京区寺之内通堀川東入百々町 546
TEL : 075-441-6644 / FAX : 075-441-6645
MAIL : info@wagasa.com

